

宇宙心理学への誘い

京都大学 名誉教授

木下富雄 (きのした とみお)

ガガーリンが人類初めての宇宙飛行に成功してから 50 年余、人類は輝かしい業績を宇宙空間に刻んできた。アームストロングたちによる月面着陸や、国際宇宙ステーション (ISS) における滞在実験を始めとして、その成果は目覚ましいものがある。ただ残念なのは、これらの成果のほとんどが、自然科学的な研究に偏していたことであろうか。

ところが最近になって少し風向きが変わってきた。というのは、これまで宇宙飛行士しか行けなかった宇宙に、一般の市民が旅立つ可能性が出てきたからである。この傾向が加速されると、遠くない将来に「宇宙コミュニティ」とでもいうべき社会が成立するに違いない。そして社会が成立すれば、そこに新しい政治や経済や文化が必然的に発生する。

だがこのような市民が作る社会は、これまで宇宙飛行士が作ってきたプロ集団と相当違うだろう。そして市民たちが宇宙コミュニティの中で安全で快適な生活を営むには、宇宙空間と人間の特性を考慮した新しい社会的ルール、つまり宇宙ガバナンスのシステムを構築する必要がある。ここでやっと人文・社会科学の出番が来たと言えようか。

こうした発想に基づいて私たちは、2002 年頃から JAXA と共同で学際的な研究を開始した。参加したメンバーは宇宙工学や宇宙医学の専門家だけでなく、哲学、文学、文化人類学、宗教学、芸術学、国際政治学、国際法などの専門家が含まれている。私の専門は社会心理学であるが、全体の統括者としてこのプロジェクトを推進することになった。そしてその成果の一端を、『宇宙問題への人文・社会科学からのアプローチ』というタイトルのもとに公刊した。

その後この研究はさらに進展し、私自身も当時 ISS に滞在していた野口聡一宇宙飛行士と共同研究を実施した。具体的には微小重力環境下における身体定位が地球上におけるそれとどう異なるか、ことに閉眼して擬似的感覚遮断環境に置かれたとき、意味存在としての自己の認知がいかなる様相を示すか、また、微小重力環境下で左右・上下の感覚が等価になったとき、「上下関係」という言葉に代表されるような地上の規範やルールはどのように変化するか、さらに ISS から地球を対象として観察したとき、「相対化」された地球問題 (たとえば国境、資源、戦争など) に対していかなる価値の変換が発生するか、などといった研究である。

だが寂しいのは、同好の士がまだ限られていることである。この夢多きプロジェクトに参加しようという意欲的な方はおられないだろうか。



Profile — 木下富雄

(公財) 国際高等研究所フェロー、京都大学名誉教授。博士 (文学)。1956 年、京都大学大学院修士課程修了。同大学助手、大阪女子大学助教授、京都大学助教授、教授、摂南大学教授、甲子園大学学長、日本社会心理学会理事長、日本リスク研究学会会長を歴任。2005 年から現職。専門は社会心理学、リスク科学。「リスクコミュニケーションの思想と技術：放射線リスクの正しい理解を目指して」(共著) など論文多数。